

制服は私を自由にする

福岡県 福岡教育大学附属小倉中学校 2年
古野 佐奈（ふるの さな）

朝の教室。私はいつものように、ズボンの制服で席に向かう。友達視線がふと足元に向かうのを感じても、もう気にしない。スカートかズボンか、それを選べるのがこんなにも自分を楽にしてくれるなんて、以前の私は知らなかった。

小学生の頃、私はずっとズボンをはいていた。自転車に乗ったり、公園を走ったりするにはスカートより動きやすかったし、冬の寒さもしのげた。でも中学に進学すると、私は「なんとなく」スカートを選んだ。周りの女子がみんなそうしていたからだ。

入学して半年が過ぎる頃、私はスカートに違和感を覚えるようになった。風の日の通学、寒い朝、サックスを吹く時。どれも小さな不便だけれど、毎日積み重なると、それは無視できないものになった。

「ズボンのほうが、私には合っているかもしれない。」そう思ったのは、ちょうど私の誕生日が近づいていた頃だった。私は思い切って、母に「ズボンの制服がほしい」と伝えた。最初、母は「スカートの方が可愛いと思うけど…」と少しためらっていた。でも、私の強い気持ちを理解してくれて、誕生日プレゼントとして買ってくれることになった。私は本当に嬉しかった。

夏冬どちらでも使えるように、夏用のズボンを選んだため、届くまでに二～三ヶ月ほどかかった。待っている間は少しもどかしかったけれど、「ようやく自分らしい制服が手に入る」と思うと、楽しみで仕方がなかった。

ズボンが届いて、初めてそれをはいて登校した日、私はわくわくしながらも少し緊張していた。「女子なのにズボン？」という空気を感じるかもしれない。そんな不安を抱えながら教室に入ると友達が

「え、ズボンじゃん！」

と声をかけてくれた。

「うん、動きやすいし、こっちのほうが好き。」

と答えると、

「似合ってるよ。」

と笑ってくれた。驚いた顔をする子もいたけれど、それでも私は自分の選択に自信がもてた。

制服には、「女子はスカート」「男子はズボン」というイメージがまだまだ根強く残っている。誰かがそのイメージから外れると、「どうして？」と不思議がられる。でも私は、自分が自然に感じる服装を選んだだけだ。性別に関係なく、自分に合った服を選べる自由。それは見た目の問題ではなく、自分の気持ちを大切にすることだと思う。

とはいえ、すべての場面でズボンを選ぶわけではない。私は吹奏楽部の演奏会本番では周りにあわせてスカートをはくことにしている。みんながローファーを履いている中、一人だけ運動靴だと目立つように、まだズボン女子が珍しがられる世間では、余計なところで目立ってしまうと考えるからだ。特にみんなと「揃える」ことが求められる部活だからこそ、自分の思いだけを押し通すにはいけないと思っている。でも私はそれを辛いとは思っていない。それは「スカートをはきなさい」と言われていないからこそその納得感だと思う。大切なのは「選べること」だ。

最近では、「スカートをはきたい男子」の声もニュースなどで取り上げられるようになった。制服の選択は、ただのファッションや身だしなみの問題ではない。私たちがどんな価値観の社会で生きるのかということに関わっている。

国連のSDGsにも、「ジェンダー平等を実現しよう」という目標がある。性別による役割やイメージに縛られず、誰もが自分らしく生きられる社会を目指すこと。それは世界中が取り組むべき課題であり、制服の選択制もその一歩になると私は思う。

私にとって、制服は「決まり」から「選べるもの」に変わった。そしてその変化は、私の気持ちにも、自信にもつながっている。毎朝ズボンで登校するたびに、自分の意思で選んだことを思い出す。母も私の考えを尊重してくれたからこそ、私は今の自分でいられる。

制服が私をしぼるのではなく、自由にしてくれる—そう感じられる今、私は少し誇らしい気持ちで学校に向かっている。制服を通して「自分らしく生きる自由」を選べる社会がもっと広がっていくことを願っている。